「カナダ」という場から
—マーガレット・アトウッド『ライフ・ビフォア・マン』

岡　村　直　美

1　はじめに

Who do you think you are ?

これは、マーガレット・アトウッド（1939年—）の『死者と対話して—書くということへの一作家の考察』（2002年）の第１章の章題で、同じカナダ女性作家で同志ともいえるアリス・マンロー（1931—）の短編小説集の題から借用したものである。2000年のケンブリッジ大学エンプソン・レクチャーに招かれて行った、６回シリーズの講演を基に編まれたこの書は、第１章で「作家とはなにか」の分析を手始めに、「書くということ」に対する論全体の方向付けを行っている。いつ、どこで、どのように、だれから生まれ、どのように育てられたかが、書くものを決定するという前提による。作家のアイデンティティは、当然ながら、その作品と不可分だが、その関係の強弱はそのときどきの条件により変化する。さらに、作家は読者と自分自身の双方から次の３つの質問をしばしば投げかけられるという。

Who are you writing for ?　Why do you do it ?　Where does it come from ? [1]

アトウッドの場合、ハウェルズも指摘するように[2]、白人で英語を話すカナダ人の女性という、逃れられない文化的なアイデンティティから作家としての歩を踏み出し、それを持ち続けてはいるが、当初から地域的なものが行き着く先に人類全体の問題の存在を認識し、次第に視野を広げてきた。ステレオタイプの意識や思想には強く抗議する柔軟な彼女の姿勢は、森林昆虫学者の父に従って一家で厳冬期以外はケベック州北部の森林地帯の自然の中で過ごした幼少時から培われ、長ずるにつれてさらに発展したものである。

作家自身が第４作の『ライフ・ビフォア・マン』（1979年）を出版した時点でのインタビュー[3]で、前３作は１つのユニットを形成し、この作品は続く２作とともにあらたなユニットを形成すると語っている。この言に従って、その後の作品を含めた全11作の長編小説を、出版年順に並べると、緩くではあるが、グループに括ることができる。すなわち、『食

べられる女』(1969年)、『浮かびあがる』(1972年)、『レディ・オラクル』(1976年) が第一グループ、『ライフ・ビフォア・マン』(1979年)、『ボディリ・ハーム』(1981年)、『侍女の物語』(1985年) が第二グループ、『キャッツ・アイ』(1988年)、『寝取る女』(1993年)、『グレイスという別名で』(1996年) が第三グループと括れ、以下2作『昏き目の暗殺者』(2000年)、『オリックスとクレイク』(2003年) はそれぞれ独立した大作と位置づけられる。

アトウッドが作家をめざした1950年代当時、職業人としての女性作家はほとんど存在せず、文学界そのものが確立していなかったカナダでは、カナダ人であり、女性であるという、いわば作家となるための二重のハンディキャップに立ち向かわなければならない状況にあった。アトウッドは、作家の道を選んだ理由をつぎのように語る。

> You would come to a fork in the road where you'd be forced to make a decision: "woman" or "writer." I chose being a writer, because I was very determined, even though it was very painful for me then (the late '50s and early '60s), but I'm very glad that I made that decision because the other alternative would have been ultimately much more painful:[4]

アトウッドはすでに初期作品から、全作品で繰り広げられる全テーマの萌芽を厳然と内蔵させているが、カナダのこうした状況を踏まえて、いきおい、カナダと女性という2つの問題を提起しないわけにはいかなかった。とくに第一グループの作品群では、女性であるという作家のアイデンティティが前面に押し出されていると見られる。後年アトウッドは再三、女性運動は1970年まで見られなかったので、1956年に書き始めた自分は、いわゆる「フェミニスト」ではないと述べているが[5]、女性運動に反対というより、一党派加担のための執筆ではないことを強調する言である。さらに第二グループでは、作家のフェミニスト的姿勢は一本の大きな柱のままながら、女性であると同時に、白人で英語を話すカナダ人という、より複雑化したポリティカルな面が、徐々に浮かびあがり、やがて鮮明にあぶりだされる。ハウェルズの指摘のように[6]、アトウッドのフェミニズムはカナダ的ポストコロニアリズムのコンテクストにまでひろげられるべきものなのである。家父長制社会における女性の立場を、宗主国イギリスの植民地さらに大国アメリカの影響下の弱小経済圏たるカナダに重ね合わせて認識しているということである。その意味で第二グループの作品群は、年代順ということを抜きにしても、女性問題に焦点をあてた初期作品と、人類の普遍的な問題へとテーマを広く展開させた第三グループ以降の後期作品との橋渡しの役割を果たしている。

そこで本論では、第二グループの作品群から、特に『ライフ・ビフォア・マン』を中心にアトウッドの地域性ないしはカナダ人意識を探っていきたい。

2　カナダという場

作品論に入るまえに、アトウッドのカナダ観を概観してみたい。

アトウッドは留学中（1961年トロント大学のビクトリア・カレッジの英文科を卒業後、ラドクリッフ［後にハーバードと合併］大学大学院へ）に、アメリカ人にはカナダが「たしかそんな国がある」程度にしか認識されていないことを目の当たりにして、カルチャーショックを受けた[7]。また、彼女に自己変革の機会をもたらした、初めてのヨーロッパ旅行中（1964年ブリティシュ・コロンビア大学で教職に就く前の3ヶ月間)、彼女のことをアメリカ人と思って声をかけてきた男たちが一様に、カナダ人と知って一瞬がっかりした表情をみせたことを、あらたな発見として、『動く標的』(2004年）で回想[8]している。

これらの若き日の体験などからアトウッドは、国際関係（とくにアメリカとの）において、カナダの国家としてのアイデンティティの認識の必要性を強く実感したという。以来彼女は、いわば、カナダの文化的ナショナリズムの先頭に立ち、アメリカを中心とするメガ文化のなかで「われわれは存在する」[9]と声をあげる一方で、冷静な超越的態度をも保持してきた。加えて、内外の読者にカナダを「翻訳」する役目も、期せずして、自らに課してきた。その視点は、ドキュメンタリーなリアリズムと、オンタリオ州に住む白人で英語を話す女性という立場からみた想像上の、という複眼的なものである。

さらに、イギリス文学あるいは英語圏文学愛好家の間で、カナダ文学全体が、かつてのカナダの地理的状況そのままに、未踏査でおもしろくない荒野とみなされる傾向が歴史的にあると、アトウッドは分析する。それは、1972年出版の『サバィバル—テーマ別カナダ文学案内』や1991年のオックスフォード大学クラレンドン・レクチャーあるいは出版された『奇妙なこと—カナダ文学における悪意ある北部』で彼女が再三指摘[10]しているとおりである。数人の作家や詩人の存在が目に触れるとしても、それはカナダの地理からいえば、荒野での岩や湿地や切り株程度にしか目立たないのだ。「わたしに関するかぎり、人生は地質学と地理学で始まりました」[11]と語るように、アトウッドの興味はその2つから発し、とくに「カナダ」のさまざまな地質的・地理的状況が、精神的な想像上の世界にまで大きく深く影響を与え、女性およびカナダ文学それぞれの陰喩の記号としての役割を果たしている、と彼女は解釈しているのである。

アトウッドは『サバィバル—テーマ別カナダ文学案内』のなかで、カナダの中心的な記号として、疑う余地なく「生き残ること」をあげる。これは、初期カナダの探検家や移住者にとっては、先住民や動物や厳しい自然と「敵対する」ことを、また多民族国家カナダの中で

一民族であることに必死にしがみつく者には、自民族の文化を「守り続ける」ことを意味する。さらに「生き残り」の場において、カナダ人は国家としても個人としても、実際にまたは象徴的に「犠牲者」[12]意識から逃れることはできないとしている。

さらにアトウッドにおいては、カナダは、人跡まれな、あるいは極端に人口密度の低い北部、開拓民が建設した村、トロントを中心とする都会という3地域に分割して意識される。「悪意ある北部」の表現が『奇妙なこと』の副題に見られるように、探検家や開拓民である白人たちにとって、北部は厳しい自然との戦いの過程での飢餓・狂気・カニバリズムといった禍々しいイメージに満ち満ちており、原住民の伝説中の人食い鬼ウェンディゴ（人肉を食して森をさまよう猟師が変じた怪物）は、そのままそっくり、その具現となっている。白人には悪意ある北部という、その同じ場が、先祖代々営々と住み続けてきた原住民たちには、自然との協調による自由獲得の場、神と遭遇する場でもあるとアトウッドは最初から看破しており、このことが彼女の文学の出発点ともなっている。また、開拓民が厳しい自然と闘いながら開発した村は、その次世代以降の者たちにとっては、初期の勤勉と忍耐の上に成り立つ真摯で清冽な約束の地に取って代わった、宗教と戒律に締め付けられた狭く息苦しい、因襲にみちた世界と成り果てて、主人公が逃げ出すべき場所になっているのは、たとえば『ボディリ・ハーム』の例を待つまでもない。この対極にある都会は、アトウッドの場合、本拠地であるトロントなのだが、そこは、多文化で自由で寛容で自己の開放につながる一方、多数派の価値観という大きな波に流されて無節操となり、競争の中に自己を埋没させ、自己喪失につながる危機をはらんだ場でもある。

しかし、アトウッドはカナダのもつ、このようなさまざまな矛盾や災厄を直視しながらも、他の地に比べれば、少しはましな地、理想に近い地としてのカナダを強調している。とくに比較の対象と目されるのは、アメリカ合衆国である。『侍女の物語』で21世紀の全体主義の独裁国家ギリードは合衆国のイメージと重ねて設定され、ヒロインのオフレッドは夫と娘とともにカナダに逃げようとして国境で一人だけ捕らえられる。ギリードで彼女が暮らしたのは、（作家が留学した）ハーバート大学キャンパスの跡地というのも皮肉ではある。このデストピアをカナダに舞台をおかなかった理由をアトウッドは次のように述べている。

> The States are more extreme in everything.（中略）Canadians don't swing much to the left or the right, they stay safely in the middle.[13]

さらに彼女は、人は非常に大きなグループではよく機能しないので、合衆国よりカナダが好きだとし、カナダはもっと親密で、まだ人々は政治のプロセスに参加できる[14]と、現在のカナダの姿勢や状況に希望を託している。

ナショナリズムについても、アトウッドは初期の自作品にはとくに民族意識はないと明言する[15]。カナダには1960年代中葉まで民族意識はほとんどなかったからで、それまで、学校ではカナダの著作や歴史をほとんど教えなかったのだが、カナダ連邦結成100周年の1967年モントリオール万国博覧会の記念行事開催などをきっかけに、芽生えた。もともと国際的だった移民国カナダが抱える問題とは、インターナショナリズムというより、ナショナリズムであった。一方アメリカは、あまりにもアメリカニズムを強調したので、国際的になりたい希望が生まれたというのが、簡略化したアトウッドのカナダ観・アメリカ観といえよう。

3　カナダ人ということ

アトウッドの第二グループ作品のトップバッター、『ライフ・ビフォア・マン』では、作家がどのように読者に対してカナダおよびカナダ人を「翻訳」しているのか。

『ライフ・ビフォア・マン』の書名は、当初『中生代（メソゾイック）にかんするメモ』だったのが、分かりにくいという意見で変えられた[16]ものである。作中にもあるように(282頁)、中生代とは三畳紀と白亜紀にはさまれた中間のジュラ紀のことで、メソゾイックは、中生代という古生物学の専門用語と同時に「真ん中の暮らし」という普通名詞でもある。アトウッドは「最高のヴィクトリア時代の小説」[17]と称賛するジョージ・エリオット（1819—80年）の『ミドルマーチ』（1872年）を意識してこの作品を書いたことを、なかば本気でなかばユーモアをまじえて、再三表明しているが、これも「真ん中」という意と関連する。19世紀のなかば、イギリス中部の町に住む、中庸的な宗教をもつ中産階級の人々を描いた『ミドルマーチ』に対し、ほぼ20世紀のなかば、カナダのトロントの真ん中で、中産階級の中年の人物中心の『ライフ・ビフォア・マン』。たしかに小説技法の上では、この作品は、アトウッド自身も認めるように、一見伝統的なリアリズムの範疇にはまり込む20世紀の『ミドルマーチ』と思わせる雰囲気がある。しかし、アトウッドの第一グループの3作に魅了された読者の中には、あのアトウッドがこんな現実的な喜劇調を描くとしたら、その意図は何なのかと戸惑いを感じる者も多いだろう。

> I *am* a political writer.(中略) The real answer is that it would be impossible to be a Canadian writer of my generation without developing a political consciousness.[18]

アトウッドは自分の作品は程度の差こそあれ、すべてポリティカルだと称している。「ポリティカル」とは、「政治的」が主要な訳語であり、抽象的な「政略上の」「理論でなく、実質の」「賢明な」「ずるい」などの意を含み、またアトウッド自身の定義は「人々の権力構造へのかかわり方、あるいは権力構造の人々へのかかわり方」[19]である。では、一体この作品の

どこの、なにが「ポリティカル・政治的」なのか。

メソゾイック、「真ん中」という語に焦点をあててみる。この語意は、均衡や中庸や調和や公平や寛容や平等とか偏見のなさといった、「どちらにも片寄らない」概念をあらわす。「ポリティカル」の文字通りに「国家や行政に関わる」の意でこの語に注目すると、カナダが採用してきた政策、すなわち1971年にピエール・トルドー首相が議会声明の中で新しいカナダの統合理念として打ち出した、二言語・多文化主義政策に結びつく。カナダには公式の言語が２つある（二言語併用主義）が、植民地時代以来、カナダ文化という公式のものはない。いかなる文化をもつ民族集団も他に対して優位に立つことはなく、基本的には、個人による選択の自由の尊重を政策とする。これは、自然・経済・政治環境の厳しい植民地からようやく独立を果たした、多民族国家カナダが選択した「生き残り」の手段として打ち出されたもので、アメリカ合衆国の国是のひとつといえるフロンティア精神、「ひたすら前進して冒険に挑む」とは、一線を画すカナダ独自の精神である。

カナダに関して「真ん中」という語に、さらにこだわれば、1940年代後半からカナダ外交の黄金時代に発揮された「ミドルパワー外交」[20]がある。これは国連外交で萌芽したものだが、政治的な理念が中道志向であるうえに、当時の冷戦構造で地理的に係争諸国の中間に位置するカナダが、中間国として仲裁の役割を発揮し、1950年代の国際社会でおおいに機能した。国としての「生き残り」手段の一部であった。しかも、その外交に直接携わった元外交官Ｊ・Ｗ・ホームズがその展開を述懐する書物[21]を出版したのは1976年で、まさにアトウッドの『ライフ・ビフォア・マン』の時期設定内なのは、偶然ではないだろう。

以上述べたように、アトウッドが、この作品で「真ん中」に執着する「ポリティカル」な意味には、この概念が象徴する「カナダ」と「カナダ人」の現状とあり方を描くことも、一部にあるのではないか。政治的信条はどうあれ、すべての人間（マン）―当然女性も含む―は等しく創造されており、その前に広がる生活は自由で平等な個人を重んじる生活であるべきだ。それをカナダは政策として打ち出しているのだ。『ライフ・ビフォア・マン』で繰り広げられる目の前の生活の成り行きと行く末は、カナダの今と未来を象徴しているともいえよう。アトウッド自身が、この作品への賛否多様な批評を軽く受け流しながらも、常にきっぱりと、これは「新しい小説（a novel novel)」[22]としているゆえんも、これが単なるリアリズムの風俗小説ではないからである。多元主義と多文化主義の理想を掲げたカナダは、将来的に、「多」の部分のバランスを保った新しいカナダ文化を開花・持続させることができるのかとの問いかけが、この作品のメッセージの１つになっている。多文化主義を標榜するカナダ人とは、思想、身上、意見、表現などの基本的自由と、一切の差別を受けることなく法

の下で平等な権利とをもつ個人である。これは、当作品出版3年後の1982年カナダ憲法で「権利及び自由に関するカナダ憲章」として、はっきりと謳われることになる。

4　カナダの現実—目の前に広がる生活

『ライフ・ビフォア・マン』の物語は、1976年10月から1978年8月という切り取った時間内に限定され、終始三人称でエリザベス、ラシア、ネイトの中心人物たちの行動や心理が丹念に追求される。彼らは家族や家庭環境という過去を背負って現在があり、それぞれ自分個人の興味や理想のライフスタイルに関心を集中させて現在を生き、それが未来に繋がるのかと、窺っている。

設定された日付内のカナダの政治的な出来事を辿ると、イギリスから離れ、勢力を増してきたフランス語圏のケベックを抱えながら、独自の政治的・文化的アイデンティティを獲得しようとする、国家として重要な時期が浮き彫りになる。次のような種々の事件のなかにカナダの政治的な模索の過程が垣間見える。

ケベック党が州議会選挙で勝利し、ルネ・レヴェックが州首相になる（1976年11月15日)。新市民権法が公布され、カナダ国民はイギリス臣民の資格を失い、またカナダ出生か帰化かを問わず、すべての市民に同等の権利が認められる（1977年2月15日)。トルドー首相がカナダ首相としてはじめてアメリカ合衆国議会で演説し、ケベックを分離しないと発言（1977年2月22日)。ケベック議会が、フランス語を唯一の公用語とする「フランス語憲章」を可決（1977年8月26日)。連邦政府とケベック政府が、同州にフランス語移民を促進する権限を認める協定を締結（1978年2月20日)。新移民法を公布し、移民における人種差別や国別人数割り当てを廃止（1978年4月10日）など。

ところが、3人の中心人物たちは自分の問題にかまけて、これらの国民的な重要問題にはほとんど興味を示さない。事件自体の一部はかなり鮮明に言及される。ということは、例えば19世紀初頭のジェイン・オースティン（1775—1817年）がナポレオン戦争などの時事問題に意図的に一切触れずに「風俗小説」として書き上げたことと、まさに反対の意図で、アトウッドは、社会・政治問題をくっきり背景においた上での登場人物たちの無関心や帰属意識の欠如という状況を描くことで、現代カナダの風俗と問題点の一部を浮かび上がらせたのである。

無関心も三人三様だ。章題に最多22回も登場のエリザベスは、一応3人の軸になる人物と考えられ、恋人クリスの猟銃自殺後1週間、心身が遊離したように悲しみに沈潜していた彼女が、ようやく我にかえった時点（76年10月29日）が、物語の発端である。やがて、少々気

を取り直した彼女は、聴力が弱ったので医者に行く途中、待合室で読むものを物色するが、3日後の11月15日の歴史的なケベック州議会選挙でもちきりの新聞にうんざりして買わない。世論が言語問題を争点とする選挙の話題で沸騰していることは承知しているが、フットボール試合同様にこの選挙には全然興味がない（50―1頁)。もともとテレビ嫌いで、家ではニュースも見ないことにしている。

エリザベスは、ロイヤル・オンタリオ博物館で特別企画展示を受け持つベテランの専任スタッフという立派なキャリアウーマンで、自宅をすでに取得して3階を貸家にし、夫の収入をあてにせずに2人の娘を育てることのできる自立した母親でもある。このような、いわば、人生の全盛期・真ん中にいるはずの彼女の、社会問題への無関心と自己中心的な生き方の背後にはなにがあるのか。

> Almost no one knows any of this about Elizabeth. They don't know she's a refugee, with a refugee's desperate habits.(中略) She knows there's nothing in her that will compel her to behave decently. (p. 142)

これは、エリザベスの過去と現在のすべてを語っていると言える。「難民」とは、必ずしも民族的な意味ではなく、困難の中を「生き残ったこと」を比喩的に表現したものである。ワスプの代表ともいえる由緒ある家族に祝福されなかった両親の結婚の事情、父の家出に始まる家庭崩壊、つづく母のアルコール依存とそれが因での焼死、引き取ってくれた母の姉ミューリエル伯母の伝統的な価値観との軋轢、妹キャロラインの自殺未遂とその後遺症による障害と死など。このような口には出せない辛い体験と一族の「落ちこぼれ」と蔑まれた精神的な自由の束縛への苛立ちが、彼女に「難民」と意識させてきた。この中で「生き残る」ために、他者に融合するより対決してひるまない強さをエリザベスは身につけた。経済的自立によりようやく手にしたかに見える自由を、もう手放さない覚悟で、彼女は結婚も恋愛も真の自由を奪うものではないと頑張ってきた。満足感の対象を国家や社会といった集団ではなく自分という個人へ集中させ、誇り高く生きようとふるまっている。だから、かえって、同僚のユダヤ系のマリアンなどに「お高くとまったワスプ」(88頁）と批判されるのだが、それも厳密な民族区分というより彼女の姿勢ゆえである。

博物館でエリザベスの同僚である古生物学者ラシィアにとって物語が始まった時点では、人生の興味の中心は中生代の恐竜であった。子ども時代から今に続く彼女の白昼夢は、中生代（ときに時代は混合するが）の林間の梢に登って双眼鏡を片手に、恐竜たちの登場をじっと待っている自分の姿だ。現代の出来事では、政治問題も同棲相手のウィリアムも両親も家族の歴史も、興味の周辺に存在するものでしかない。ケベック問題の議論が沸騰するおりか

ら、1970年のケベック「10月危機」[23]の話題をネイトからもちかけられても、当時大学4年生でガリ勉中の点取り虫だったラシィアは、ぼんやりとしかこの政治的大事件を覚えておらず、満足な応答もできない。現在話題の選挙でも、ケベックに住んでいたら、どっちに投票するかに対し、決めなければならないくらいなら「引っ越す」(57頁)、と自問自答するほどの無関心ぶりだ。彼女が「政治的でない」(55頁)のは自他共に認めるところだ。

ラシィアは、家庭内で多民族主義・多文化主義の渦中に生まれ育ったため、一族内で禁じられた話題のナショナリズムには不安をおぼえる。互いに敵同士のように付き合いのない、リトアニアのユダヤ系の父方の祖母とウクライナ系の母方の祖母に交互に預けられ、共働きの両親に代わって、可愛がって育ててもらったからだ。ユダヤ人とウクライナ人は、カナダ人の人口構成の中でイギリス人とフランス人につづく第3位の「他のヨーロッパ人」の中に分類され、この比率は年々拡大している[24]。さらに、先住民やアジア系住民などとともに構成する少数民族グループの中ではユダヤ人とウクライナ人は多数派で、カナダの多民族主義の一軸となっている。両親のいずれの家族も元祖国から追われるようにカナダに移住したが、その間の事情は隠蔽されたままだ。ただ、それぞれの意識の底に悲しみや憤怒をひそかに沈殿させて、一族はひたすらカナダ社会に溶け込もうとしている。第二次大戦中のホロコーストについても、逃げ遅れて(多分収容所で)死んだレイチェル伯母が唯一の犠牲者として数度言及されるだけである。一族はユダヤ姓エトリンをカナダで通用しやすいグリーンに変えているが、ラシィアというウクライナ名の方は英語名のアリスとせず、そのまま使用し、彼女の姓名は家族のアイデンティティの象徴となっている。ラシィアの存在そのものが多民族主義の具現であり、その中で調和を保とうとする姿勢のためにかえって、彼女は社会や政治に意図的に目をそむけ、ひたすら古生物学研究に没頭し、ある意味で現実から逃避してきた。

エリザベスの夫ネイトの社会や政治への姿勢は、2人の女性たちよりさらに屈折している。彼は例のケベック選挙には関心を示し、行きつけのホテルのバーにテレビ・ニュースを見に行く。ケベック党勝利の選挙結果に「足元で地面が動いているのに、やつらは気づかない。何だって起こり得る」とにんまりするのだが、そう思うそばから、テレビ画面に写る支持者たちに礼を言うケベック州首相予定者ルネ・レヴェックの「しわくちゃの猿顔」(63頁)に重ね合わせて、目下気になる存在ラシィアのエキゾティックな顔の幻影を見る。3年前、高収入の弁護士から現在のほとんど無収入の木製玩具製造職人への転身が示すように、ネイトは個人的な問題や趣味・嗜好に生きる生活を選択してきた。しかし、じつは「思い出すだけで不快で信じられない」(40頁)と称するのだが、彼には政界入り(多分地方自治だが)をめざしたこともあって、政治や社会的な問題への並々ならぬ関心を抑圧している。

ネイトの社会や政治へのあいまいな態度は、社会のマイノリティに対する献身的な支持者である母への反発でもある。(ネイトの姓ショエーンホフはドイツ系の名で、彼らもまたカナダではマイノリティである。) 母は第二次大戦の英雄として (じつは前線から遠いイギリスで病で) 死んだ夫を誇りに女手ひとつで一人っ子のネイトを育て、退役軍人向けの病院でパートの看護員をしながら、熱心にアムネスティの活動をしている。今でもネイトのもとにアムネスティの会報が欠かさず送られてくるのは母の差し金だが、彼は無関心を装いつつ、その活動状況はいつも視野に入れるという屈折した政治姿勢をとる。

三人三様の社会的政治的無関心で共通するのは、個人主義、「個人を全体に優先させる傾向」によって行動していることである。個人である自分の感情や希望を最優先させ、それが理想の生活であるはずと信ずる、いわゆる「カナダ人」的生き方の典型を生きている。こうした状況下で、相手との関係が基盤となる「愛」や家族間の人間関係はどうなるのか。

３人をめぐる「愛」の相関関係は、伝統的な価値観から見れば、いきあたりばったりで無責任で眉をひそめさせるものだ。冒頭、恋人のクリスに猟銃自殺されたエリザベスはショックのため半病人状態で、代わりに死体の確認には夫ネイトに行ってもらう。妻の浮気・恋愛を半ば公然と認めているネイトも、恋人のマーサ (弁護士時代の同僚) と別れて、前年のクリスマスパーティで見かけた妻の同僚ラシィアに無言電話をかけ続けている。ラシィアはウィリアムと同棲中だが、やがてネイトにひかれ、家を出る。エリザベスはクリスを失った悲しみの中にいながら、ネイトとラシィアの新たな関係の進展を知って心穏やかではいられず、発作的に行きずりの男と付き合ったり、半ば報復のためにウィリアムと性関係を持ったりする。また、当初ラシィアに一方的に働きかけたネイトも、彼女に受け入れられて同棲となると、今度はなかなかエリザベスの家を引き払わず、子どもたちやエリザベスへの過度と思える気配りで、ラシィアを苛立たせ、傷つける。どれも、彼らがめざす自由で誇り高い、理想の生活とは程遠い、お粗末な無責任ぶりに見える。

これらの行動はすべて、大真面目な当人たちが憎悪や愛や思いやりといったそのときどきの感情を正直に自由に吐露し、自分で選択した結果である。自分という個人を大切に、他人や外界に縛られずに自由に思いのままふるまえる社会は、理想的な世界だ。だが、自分という個人といえども、確固とした存在ではなく、身体的精神的物質的な状況変化でその感情や価値観が変化する相対的な存在であることは、見過ごされがちである。皆が自分の好むままに自由にふるまうことは、悪意を含んだ行動も、感情の変化にともなう自身の行動の矛盾も、それで相手の気持ちや肉体を傷つけることも、当然起こりうる。自分が思いのままに暮らすことを理想とするなら、他人もそれを願っている。とすれば、やりたいようにふるまう自由

をもつ他人は何をするか信頼できないのだから、こちらも自衛しなければならない。ハロウィンの夜、エリザベスは、近所を回ってもらってきた娘たちのお菓子の袋の中を針などの危険物や毒物が入っていないか、つぶさに点検する。自らもクリス自殺のショックから立ち上がれないにもかかわらず、娘たちを他者の悪意から守ろうとする彼女の姿は、自由な社会の裏表を熟知している人間不信者のものである。

選択は豊富にある。カナダ人はますます自由に次の中から選ぶことができる。結婚するか、同棲するか、あるいは結婚しないことにするか、結婚を継続するか、終りにするか、結婚して、あるいは結婚せずに子供を作るか、全く作らないか、結婚による性生活か、結婚なしの性生活か、独身を貫くか、異性愛か、同性愛か、あるいはそのどちらもか、など。[25]

ビビーは1990年出版の『モザイクの狂気』の中で、1960年代以降のカナダで加速された「構造的、機能的選択の自由」の中での愛や生活様式の有り様をこのようにまとめているが、これはまさに『ライフ・ビフォア・マン』の中で繰り広げられた人間関係そのものでもあることに驚かされる。彼の指摘のように、無限の選択の自由の中での人間関係は、互いに我慢する必要がない、いわば「使い捨て可能」[26]の関係となる。「人々は自分にとって利益があると分かると、非常に携帯に便利な橋でつながれることに同意する。しかし、その橋は、相互の福利がたかめられている間だけ架かっている」[27]。ラシィアはウィリアムとの携帯橋をはずし、ネイトへと架け替え、ネイトはエリザベスとラシィア両方に橋をかけるが、徐々にエリザベスとの橋をはずしにかかる。その一方で、彼は弁護士に再就職するときに世話になるなど、マーサとの橋の再建も可能性を残している。すべての人間関係は好みのままの恣意的なもので、彼らも現状に忸怩たる思いを抱くものの、感情のまま、正直に行動した結果がこれである。

様々な言語や文化の背景をもった人々が共に住める社会の建設という理想を掲げたカナダでは、個人が自由に生きるためには我慢をする必要はないはずである。こうした社会では、他人との対立を回避するための最大公約数的な手段は、寛大以外にはない。これは、人間関係が複雑になり、価値観の違いが拡大し、民主主義すらその欠点の指摘をまぬがれない20世紀後半の社会で、E・M・フォースター（1879—1970年）などが最大の信奉をおく価値でもある[28]。さらに、ブルームはフロンティア精神で突き進んで来たアメリカ合衆国の変容した現状を次のように嘆いているが、それはカナダでは建国当時からの信念を期せずして、言い当てている。「寛大はついに自然権を凌駕した。市民教育は建国へ専心することから、歴史や社会科学に基づく寛大へ専心することに転じ」[29]、人々は他の国や他の時代に無関心とな

り、関心をひくのは自分自身のみになってしまった。「寛大とはわれわれには他者は要らない、という意味」[30]なのだから。

『ライフ・ビフォア・マン』に描かれた人物たちは、現実の個人生活を生きていると同時に、カナダとカナダ人全体の現実をもあらわす記号となっている。社会や政治に無関心で帰属意識の希薄な人物たちの日常の行動にカナダの抱える問題点を浮き彫りにさせた点でも、この作品は極めてポリティカルな小説である。現代カナダの問題点を要約して、アトウッドは警告する。

Canada's not a goody-goody land of idealists.(中略)　The trouble with real life is once you try to implement Utopia, you end up with the Inferno.[31]

ここで、日付入りの3人の人物の名が交互に章題になっている物語構成に再度目を向けると、クルテンの『恐竜の時代』の一節がエピグラフに選ばれた作家の意図に合点がいく。

Instead of a part of the organism itself, the fossil may be some kind of record of its presence, such as a fossilized track or burrow....These fossils give us our only chance to see the extinct animals in action and to study their behavior, though definite identification is only possible where the animal has dropped dead in its tracks and become fossilized on the spot.

この物語は、ある時代のカナダに住む人類（カナダ人）の行動の観察記録ともとれる。アトウッドは多文化主義・多民族主義の精神を信じ、自由を重んずるカナダの理想を強く支持しつつも、他者との摩擦が生じると、調和と共存を願うあまりに無関心を選び取る傾向に、将来への危惧を抱き、化石化した絶滅動物と同じ運命を辿る恐怖と重ねて、警告のメッセージを送っている。

5　カナダ人を超えて—人類共通の生活

標準的な「カナダ人」を生きるエリザベス、ネイト、ラシィアたちが抱く、個人として自由にふるまいたいという理想実現の欲求と対立するのが、「子ども」の存在だ。一般的には「子ども」を「家族」に置き換えも可能だが、この場合、必ずしもそうではない。3人は程度の差こそあれ、精神的な重荷として親たちとその一族を背負っているが、これもカナダ人的理想の家族関係、「両親や祖父母の中核的家族集団への参加も自由選択的」[32]に従っている。エリザベスは、養母のミューリエル伯母を家族としてクリスマスを共に過ごす習慣はすでにやめ、娘たちを伴った新年の短い訪問で済ませている。ラシィアも、両親とはまれに訪れて食事をふるまってもらうくらいの付き合いで、同棲相手がウィリアムからネイトに代わった

などの私生活の詳細や悩みを告げない。ネイトは思いやりのある息子と自負するが、実際は娘たちを時折預ける便利な場所として母を利用しているにすぎず、母の政治運動も手伝わず、その願いを無視して、弁護士から木製玩具製造職人へ転職した。

一族や親はいわば過去として切り捨ても可能だが、現在進行形か未来の問題である自分の子どもとなれば話は別である。個人主義が信奉され、権利と自由が尊重され、性の解放が進み、真理は相対的なものとされがちな多文化・多民族主義社会でも、いくつかの基本的なルールが守られる現実がある。その普遍的な問題のひとつが、子どもである。子どもを生むのは個人の好みだが、子育ては恣意的にはできない。

クリスの自殺は、エリザベスが夫はともかく、子どもたちを捨てて自分のもとに飛び込むことを拒否したために、怒りと絶望の末、実行された。保守的な道徳を代表するミューリエル伯母の言葉「小さな子どもを持つ母親なら、家族を壊してまで自分自身のわがままな満足を満たしたりしないものよ」(207頁)が、エリザベスの胸奥深くにあり、ネイトの中にも「母親」を「父親」に置き換えて生きている。ラシィアとの同棲に踏み切ったあともネイトは、子どもたちの面倒を見ると称してエリザベスの家に繁雑に出入りし、彼らを新居に泊まらせる。ネイトもエリザベスも、子どもに対する愛情と責任感では自分に正直に行動するが、他への思いやりまでは考えがおよばず、相手を傷つけても気づかない。

> The children were not individuals, they were a collective, a word. *The children*. He thought all he had to do was say *the children* and she would shut up, like magic. (p. 284)

ラシィアも、ウィリアムとの同棲中は、博物館の勤務や恐竜の研究に勤しみ、自分の心は自分で管理して、いわば、カナダ人にとっての理想である自由な生活を満喫していた。しかし、ネイトを完全に自分の方を向かせるには彼の子どもを産むしかないと、唐突に思い定め、結局妊娠して物語は終わる。かつて、ラシィアは環境問題専門家ウィリアムの影響で、DDTに汚染されている地球の現状を憂い(134頁)、また骨盤が狭い自分には出産は無理と意識していた。ラシィアはウィリアムとの「合理的な」共同生活を捨て、ネイトとの「矛盾に満ちた」生活を選んだということである。

愛するとは他者の存在を認め、自分の自由と相手の自由を秤にかけ、ときには自分が譲り、自由の侵食もありうることである。この献身と自由の束縛は、パートナーに対しては、愛の程度により、選択的なものであるとしても、子どもには親として、いやおうなく求められることになる。その生活は、互いに自由で干渉し合わずに共存共栄を求めるカナダ人の理想からはみだした、人類共通の生き方、いいかえれば、人類が「先史時代」以来営々と続けて来

たものでもある。カナダ人を越えた、あるいはカナダ人である前の人類の生活である。多文化主義、多民族主義のなかで行き着いた理想である、個人の尊重や自由の謳歌も、無制限にはいかないこともありえる。

Some people, by "freedom," mean freedom to do whatever they want to, without any limitation whatsoever. That isn't the pack of cards we're dealt. We are dealt with a limited pack. So I would see freedom more as the power to use what you're given in the best way you can.[33]

アトウッドは、カナダ人とカナダの風土をこよなく愛し、その行き方を支持しつつ、それのみを追求することの将来に不安をなげかけ、警告を発する。カナダ人はカナダという厳しい自然と文化的風土のなかでいかに個人が「生き残るか」を命題に試行錯誤の結果、再三述べたように、多文化主義と多民族主義を押し立てて共存の道を歩もうとしてきた。だが、いまや個人としてカナダ人としてだけの「生き残り」ではすまないことをアトウッドはここで打ち出している。トウィッグの指摘のように[34]、これは人類絶滅の可能性を初めて、まじめに扱ったカナダ小説である。

ウィリアムとラシィアは、環境と古生物の学者同士として、地球上の生物の「絶滅への興味」(118頁)を唯一の共通点とした同棲カップルとして、なかばコメディ・タッチで描かれている面がある。ウィリアムは将来ゴキブリ以外のすべての絶滅を信ずるが、ラシィアはもっぱら過去の恐竜絶滅に関心があり、人類の絶滅の可能性についての危惧はあいまいだ。「恐竜は生き残らなかったけれど、それで世界の終わりになったわけではないわ」(19頁)と多少楽観的な態度をとりながらも、「自分が生き続けることを許されるべきとの理由は一つもない」(148頁)と謙虚でもある。クリスの死後絶望の淵に沈むエリザベスも「わたしは生き続けなければならないことは分かっている」(90頁)と意識し、生き残る決意で立ち直るきっかけをつかもうとする。ネイトも最後に「肉体は宇宙の一物体で、いつかは死ぬ」(268頁)と個人ではなく、宇宙規模であらためて自己を認識する。「子ども」は、ともかくも絶滅に対抗する記号である。

物語は、登場人物たちが典型的なカナダ人の生き方の象徴として自由に生きるという理想の追求の結果、感情のままに離れたりくっついたりの喜劇調で進行するが、三人三様に自分を建て直し、現実を直視するきっかけを得て、終わる。人間が太古から営んできた、矛盾にみちた寛容と妥協の、普通の生き方である。いわく、ネイトはラシィアとの生活を選んでエリザベスとは正式に別れ、生活のために木製玩具職人から弁護士に戻る。また、はじめて母のアムネスティ運動のビラ配りを手伝うなど、抑圧していた政治への興味を解き放ちはじめ

る。ラシィアは今後ネイトの子どもを生んで、職業と子育てという、大多数の女性たちが歩んできた、気苦労の多い生活に踏み出すのだろう。エリザベスもミューリエル伯母の死で子ども時代からの家族の呪縛を解かれ、またパートナーとしてのネイトに頼らずに、社会人としても家庭人としても真に自立した生活のスタートを切ることになる。たとえ気ままな自由は多少の犠牲を強いられようと、未来に展開する生活の可能性を探る道を選んだ。カナダ人であることを越えた、個人と集団の均衡を保った、多少なりとも人類共存・共栄の夢を実現しようとする生活である。

アトウッドはこの物語を現代の寓話として、われわれに人類のこれからの生活を遠望させようとしているのである。

(テキストはMargaret Atwood, *Life Before Man* (1979; London: Vintage, 1996) を使用した。本文の引用頁数はこの版による。

註

(1) Atwood, *Negotiating with the Dead*, p. xix.

(2) Howells, p. 2.

(3) Ingersoll, p. 136.

(4) Ingersoll, p. 117.

(5) Ingersoll, p. 140.

(6) Howells, p. 8.

(7) Ingersoll, p. 78.

(8) Atwood, *Moving Targets*, pp. 173–82.

(9) Ingersoll, p. xi.

(10) Atwood, *Strange Things*, p. 2.

(11) Ingersoll, p. 131.

(12) アトウッド『サバィバル』33頁。

(13) Ingersoll, p. 223.

(14) Ingersoll, p. 56.

(15) Ingersoll, pp. 109–10.

(16) Atwood Papers, MSS Collection 200, Box 30, 31.

(17) Ingersoll, p. 128.

(18) Ingersoll, p. 137.

(19) Ingersoll, p. 185.

(20)　日本カナダ学会、144頁。

(21)　J.W. Holmes, *Canada: A Middle-Aged Power* 日本カナダ学会、145頁。

(22)　Ingersoll, p. 178.

(23)　イギリスの在カナダ商務官ジェイムズ・クロスが、ケベック解放戦線に誘拐され、2か月後に解放。ケベック州労相ピエール・ラポルトも同組織に誘拐されるが、遺体で発見される。連邦政府が戦時措置法を発動。

(24)　ビビー、58頁。

(25)　ビビー、110頁。

(26)　ビビー、197頁。

(27)　ビビー、198頁。

(28)　フォースター、「私の信条」

(29)　ブルーム、21頁。

(30)　ブルーム、27頁。

(31)　Ingersoll, p. 122.

(32)　ビビー、79頁。

(33)　Ingersoll, p. 151.

(34)　Ingersoll, p. 121.

引用参考文献

マーガレット・アトウッド『サバイバル—現代カナダ文学入門』加藤裕佳子訳　御茶の水書房　1995年。

木村和男、フィリップ・バックナー、ノーマン・ヒルマー（共著）『カナダの歴史—大英帝国の忠誠な長女（1713—1882）』刀水書房　1997年。

日本カナダ学会編『資料が語るカナダ—1535—1995』有斐閣　1997年。

レジナルド・ビビー『モザイクの狂気——カナダ多文化主義の功罪』太田徳夫／町田喜義訳　南雲堂　2001年。

E・M・フォースター「私の信条」『民主主義に万歳二唱』小野寺健訳　みすず書房　1994年。

アラン・ブルーム『アメリカン・マインドの終焉』管野盾樹訳　みすず書房　1988年。

Atwood, Margaret, *Strange Things, The Malevolent North in Canadian Literature* (Oxford: Clarendon Press, 1995)

Negotiating with the Dead, A Writer on Writing (Cambridge: Cambridge University

Press, 2002)

Moving Targets, Writing with Intent, 1982–2004 (Toronto: Anansi, 2004)

Holmes, J.W., *Canada: a middle-Aged Power* (McClelland and Stewant Ltd., 1976).

Howells, Carol Ann, *Margaret Atwood, Second Edition* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2005)

Ingersoll, Earl G., (ed.) *Margaret Atwood—Conversations* (Ontario: Firefly Books, 1990)